

2 人権教育へのアプローチ

荒川哲郎

1) 人権教育へのアプローチ

A) 罪深きものを認めることからの出発

私は学校に通っていた頃、吃音で悩んでいました。今でも緊張したり、体調がコントロールできない時など、急に言葉がでてこない時もあり、困ってしまいます。結婚式の緊張の解けない場面でのスピーチでは、練習を繰り返していても、言葉につまり、冷や汗をかくことがあります。「このまま、ずっと言葉がでてこなかったら、どうしよう」と思う時、不安になります。しかし最近は「出にくい言葉は使わない」「つまった時は、その言葉を飛ばして、次の言葉を話す」など「ごまかしのテクニック」を身につけてきました。「経験からの知恵」とでも自慢したいのですが、聞いている人には、さぞかし、むずかしい話になっているのではないのでしょうか。

小学校の時のことを振り返りますと、国語の音読の時間のドキドキを思い出します。どこから、自分が読みはじめるのか、そして、最初に読む言葉が「発音できるのか」が大問題だったのです。ずっと読み始める言葉ばかりを気にしていました。実は、自分が「どもることより、みんなから笑われたり、蔑まされることを非常に怖れていました。けんかになると、相手が、いつ「どもり」の言葉を使い、からかうのかをずっと怖がっていました。その言葉で、からかわれることがたまらなく嫌だったのです。けんかで、「どもり」と言われて、落ち込んでいた時に、友達が「おまえにもいい所があるよー」と、かばってくれたことで、救われた気持ちになれたことを思い出します。

放課後、全国を巡回している私設の吃音の矯正会に通ったことがあります。そこでは、

私よりスムーズに話せない人がほとんどで、「自分のどもりは軽い」と思っていました。訓練では「あいうえお」を歌をうたうように「あ〜い〜う〜」と腹式呼吸をしながら、ゆっくりと息を吐きながら発音する技術を教えられました。そのなかでは、私はうまく発音できる方で、先生からのアドバイスは、ほとんどありませんでした。言葉につまり、顔を緊張させてながら、挑戦している人を見ると「かわいそうやなあ」と思いました。特に、女の子の場合に「将来、女なのにどうするのかなあ」と頭をよぎりました。いつのまにか、自分の吃音を他人と較べてしまい、「重い」吃音の人をみては、安心したり、「あの人より、自分はまだいい」との優越感をもちました。しかし学校では、みんなの前では、うまく本が読めない時があり、なかなか自信がもてなく、話すことへの劣等感を持ち続けました。いまでも自分の吃音を否定的にとらえている時があります。うまく話せない時に落ち込んだり、みんなが吃音の話をすると自分を傷つけないように逃げたりもします。また吃音の人と出会う時、自分の吃音を基にランクづけして「自分より軽い、重い」との比較をしている自分に気付く時もあります。

横塚晃一さんは、「母よ!殺すな」のなかで、自分の気持ちを率直に書かれています。『自分より重い障害の人をみれば、「私はあの人より軽くてよかった」と思い、知的障害の人をみて「自分は体はわるいが、幸いあたまは・・・」と思う。』彼は、その自分を「あさましい」と考えます。さらに彼はその「あさましさ」をエゴイスティックな罪深きものとしてとらえるのです。そして、その自分の罪を問いただし、「では、自分自身として何をなすべきなのか」を問い始めます。『なぜ、自分の「あさましさ」を罪として、とらえるのでしょうか。なぜ、それを問い続けるのでしょうか。』を私のそれと重ねて考えてみようと思います。

B) もっと自分を愛せるように変わりたい。

この「あさましさ」は、どのような意味があるのでしょうか。不安な時、他人と自分を較べ、劣る部分を見出し、気持ちを安定させている自分がいます。そこには、人を蔑ん

でも、自分さえ、うまく生きていければよいとの、「自己中心性」がみえます。

自分に向けられると痛い「まなざし」「ことば」を自分のために、他人に向けています。

自分が傷つけられることには、敏感なのですが、他人を傷つけることには鈍感なのでしょう。相手の気持ちと自分のそれを重ねられないのでしょう。そこには、人への思いを巡らす関係、信頼をつくってこなかったのだろうか、とも思います。自分が「どもり」といわれる時を考えてみると、自分を傷つける人を恐れたり、憎んだりします。そして、自分を蔑んだりもします。さらに悩んだり、苦しんだりするのです。それらを知らながら、この「あさましさ」で、人を傷つけてしまいます。これは、「大きな罪」と思います。

それでは、この「あさましさ」を「罪悪」として、問い続ける意味は何でしょうか。

これを罪悪視することは、自分を否定することにつながる恐れがあり、自分を「イヤになり」自信の喪失に繋がるとの考え方もあります。確かに、自分を否定することに留まっていれば、マイナスなことが多いかもしれません。私は、そこに止まらなくて、横塚さんのように、前向きに進みたいと思っています。「この問い」と自分を相対化することで、内なる自分と、「対話」が始まります。「ありのままの自分を素直に認めることを出発としたい。そして愛せる自分をつくるために、自分を変えていきたい。そしてどのように自分が変われるのかを楽しみにしたい」と思い始めました。「逃げないで、それに向き合う自分を応援したい。もしかすると、それが自分を変えていけるポイントになるのでは」と、期待と勇気をもらえます。

しかし「あいまいに逃げ続ける」と、この「あさましさ」を否定する機会も逃し、いつのまにか、表面的に人を価値づけ、ランクづけを続けるのでしょう。これは人と人との互いの不信感をつくる原因とも考えられます。さらに互いの信頼を失うことだけではなく、自分のありのままの姿に目を背けることになり、自分を本当に愛せないのではないのでしょうか。そして「今、ある人との関係」も壊していくことに繋がるかもしれないと思います。

最後に、横塚さんは、「あさましさ」を罪と認め、「では自分は何をなすべきなのだろうか」

と、人としての生き方を考えています。さらに彼は「お互いの連帯感はどこから出てくるのではないのでしょうか。まして、我々障害者とそうでない人達との交わりとは？ 障害者福祉とは？ ひいては人間社会のありかたとは？」と、さらに「自分の罪を省みることがない限り、強者のおめぐみになり、所謂やっているという慈善的官僚的福祉にならざるを得ないのでは」と問題を提起しています。

2) 障害のある人との関係をとらえなおしてみよう

A) 本音が言い合える関係をつくりたい

障害のある人とのつながりを持ち続けたある大学生の話から紹介します。

私達の大学には、いろいろな人からの介助を得ながら、地域で暮らし続けている「障害」のある人がボランティアの募集にきます。話が終わり、募集のお願いをされたその後で、私の所へ彼女が話しにきました。そして「障害のある人とのつきあいは、もううんざり。介助のボランティアの話は断りたい。」と、話し始めました。そこで、彼女に理由を聞いてみました。彼女は過去を想いだしながら、『小学校、中学校の時、先生が障害のあるこどもの世話係として、自分を選び、任せた続けたこと。小学校の時は、障害のあるこどもの「世話」をすることで、自分が「何かよいこと」をしている気持ちで、すごしていたが、中学校の頃から、障害のある友達に「善いこと」をして、教師から認めてもらい続けている自分を「欺瞞的な人間」として、とらえて始め、悩み続けたこと。特に、自分の気持ちを押しさえ、本音でつきあっていないこと、しかし教師からは期待され続け、それを裏切れない自分に疲れはてたこと」と話を続けました。私も、障害のある人達とのつきあいの経験から、「ある時期は、自分の「善いことをしている」との姿が、自分のありのままの姿ではないことが「イヤ」なり、悩んだこと。そして自分の差別性に向き合わないで、「障害」のある人達の側に立っていると思い、差別などはしない人間になりたいとの強い願望だけをもっていたこと。そのため、たとえ「障害のある人が納得できないことを言っても、それを正しいと思い、疑わないでいたこと」などを彼女へ話し、「今は、自分のホンネを言い、け

んかもできるようになったこと、それで、楽につき合いができるようになっている」と、気持ちをはっきりと語りました。

彼女と私の経験を重ねてみますと、「自分を感情を押し殺すようなつきあいかた」その結果、「身がもたない」状況に自分自身を追いつめていくことに共通性が見出せます。今から、振り返りますと、本当は自分の気持ちを率直に語ることが必要だったのかも知れません。しかしそれができなかったのです。

なぜ、自分の思いを率直に表せないことが続いたのかを考えてみます。その一つには、私自身の障害者観による「自己規制」が考えられます。「障害」のある人には、「やさしくしなければ」との一方的な気持ちが「親切な思いやり」としていたことがみえてきます。しかしそれは本当の「やさしさ」ではなく、「かわいそうな障害のある人」を高い立場から「思いやる見下し」であることにきずかれます。また「障害」のある人には「このようにしなければならない」との社会通念に、呪縛されている自分の様子がうかがえます。このような状況のなかに巻き込まれていくことで自分の言葉を失なったのでしょうか。人権教育、総合的な学習が「障害」のある人への態度を社会のある価値観に規制され、画一化していくこと、つまり、一定の枠に、はめ込む教育があるとすれば、再考することが必要になるのではないのでしょうか。

B) どのような人と人との関係が望まれているのでしょうか。

ピープル・ファスト運動からの提起

現在、世界の大きな潮流になっているピープル・ファストの運動のなかでの、知的障害のある人たちのことを紹介します。長い沈黙を破り、「私たちは障害者であるより、まず人間でありたい。(People First)」と自らの気持ちを自分の言葉で語り、社会へアピールすることを続けています。その運動では知的障害のある人達が、支援する人達と共に、自分自身を変えていくことに挑戦しています。そのためには「自分たちを信じてほしい」そして「信じてくれさえすれば、問題はない」と、話しています。「信頼できる仲間がほしい。

そして自分自身を信じたい」さらに「信頼できる人の助けを得て、住み慣れた地域で生活したい」と訴えています。なぜ「信頼」にこだわるのでしょうか。また「信頼」とはどんなことでしょうか。彼等が「信頼してほしい」と訴えている背景をみんなで知る必要があるのではないのでしょうか。

さらに「自分がしたいことをまず、聞いてくれる友達、それを実現できることを一緒に期待し、応援する友達。いざという時、手を取り合える友達がほしい。そして信頼できる人と助け合えたり、地域で、生活をしたい」と望んでいます。それは互いに本音を言い合えたり、けんかもできる友達関係でもあります。さらに信頼して助けをたのめる人(アドバイザーと呼んでいます)としては、専門家より友達の方が多いようです。なぜアドバイザーには友達が多く選ばれるのでしょうか。理由の一つには友達は「これをしなさい」と指示したり、「こんなこともできないのか」との評価も少ないためです。さらに友達関係では、互いに「思っていること」を言いやすい関係だからでしょう。そして「本当に生活を楽しめる」からではないのでしょうか。ピプル・ファストの人達のなかには「支援する人は私たちの前に立たないでほしい。なぜなら、私はあなたに従ってしまうから。また後ろにもたたないでほしい。私があなたのリーダになってしまうから。必要な時に、一緒に行動ができるように、手が届く私のそばにいてほしい。」「Stand by me」との基本的な人間関係について話しています。「自分がしたいことをまず聞いてくれる友達、それを実現できることを期待して、応援してくれる友だち。また「いざという時、手を取りあえる」人たちと地域で一緒に生活をしたいと望んでいます。さらに最初から「あなたはできないから、先回りして助けなければ」と、決められることがあれば、それを「いやだ」と拒否する意見をいえる自分にしたいと仲間と一緒に自分に自信が持てる機会をつくっています。

④ 「違い」を豊かに

学生さんがコンビニエンスストアでのアルバイトの時の経験です。いつも、ニコニコして、店に立ち寄る常連のお客さんに、ろうの人がいます。そのお客さんが、急にトイレに

行きたくなり、困った様子で走り書きをして尋ねたそうです。「申し訳ありませんが、トイレの場所を教えて下さい」と。彼女は別の建物にあるトイレの場所を「どのように説明するのか」と困りますが、簡単な地図を書いて、身振り、手振りでどうにか説明しました。しかし、なかなか、うまく伝わらないのを感じます。「どうして、トイレの場所を聞くのに、申し訳ありませんと書くの。私はショックだった」と衝撃を受けたことを振り返ります。そしてこの経験を彼女は活かします。トイレへの地図を貼るだけではなく、駅の周辺の簡単な地図をつくることも店長と話し合います。「よく他の店や道を尋ねるために、店に入ってくる人が多い」ことから思いついたそうなのです。さらに商品の置いてある場所をわかりやすく案内する情報も店内に貼ることを考えています。「ろうの人との出会いからお客さんへのサービスの提供の方法がわかる、きっかけになった」と話します。うまく通じ合えない「コミュニケーションの障害」に遭遇したからこそ、生まれてきた知恵ではないのでしょうか。

「禍転じて福となす」のことわざの様な、困ったの経験から生まれる知恵は数多くあります。「ライター」、「ファクス」も障害のある人達の生活の不便さから、産み出されたヒット商品です。「バリアフリーのまちづくり」戦略のなかで、トイレも障害のある人達だけではなく、赤ちゃんのおむつを交換したり、女性がゆっくり化粧をしたり、服を整える空間にもなってきています。一昔前までの薄暗いトイレの部屋が、誰もがくつろげる明るい部屋になりつつあります。障害のある人達の「訴え」から始まったことが、新たな空間づくり、まちづくりにもつながっています。「見事かな 困った時の 人の知恵」。ここで、考えなければならないことはなんのでしょうか。私達に求められていることは、当事者の問題解決にだけに限定しないことではないのでしょうか。つまり、誰もが困る場合もあるとの想像性を発揮して、みんなの問題に普遍化し、次のステップを見通す戦略を創ることではないのでしょうか。問題の解決を望む時、問題の独自性(違い)と共通性(同じ)を考慮することが基本になります。そのためには、日頃から自分だけの問題解決に止まらないで、困

っている人達のことを思い出したり、「こんなこともありえるかも知れない」と想像をしていく教育が大切ではないのでしょうか。そのためには、「違い」を持つ人たちと共に、いろいろな経験をしていきましょう。そして利害関係のある「せめぎあい」もたくさんすることも必要ではないのでしょうか。

3) 自立を考える

現在、学校の教育のなかでの「今日的テーマ」の一つに自立（キーワード参照）があります。親からの自立、「市民」になるための自立について、いろいろな教育の目標が考えられています。主に自立の概念としては、まず個々人の能力を高め、働けることや独力で生活できることを目標にして受け取られているようです。したがって「個に応じた」教育プログラムが自立の基本としている学校もあります。しかし一人ひとりの「能力」の発達を促す教育、こどもが自分の個性を発揮する教育が、自立した人生の実現にどのようにつながるのかの具体的な説明はみられません。なぜ、自立が必要とされるのでしょうか。どのようなむずかしさが、自立を実現するためにはあるのでしょうか。さらに、一人ひとりが自立するためには、どのような社会がもとめられるのでしょうか。と様々な疑問が生まれてきます。

そこで、人権教育との視点からも自立について考えてみようと思います。自立については「障害」のある人たち自らが議論を重ね、実際に命をかけて、行動してきたテーマでもあります。1970年代、「親の管理」「施設の管理」を離れ、「そよかぜのように街に出よう」と、地域で自ら「介護者」を捜して、生活をする人達が現れました。「おとなになっても、親から一方的に世話をされ続ける関係では、自分が望む生き方を自らの意志で決めることができない」との考え方に立ち、「親の愛」からの解放を獲ち得るために、壮烈な自立への闘いがみられました。そして自己の内部にある「あさましい」障害者観と対峙し、さらに、まわりの人達の障害への差別観を問い続けて自立した生活をしている人達もいます。

ここでは、「なぜ親から離れ、地域で自立にこだわるのか」「なぜ親は、こどもからはな

られないのだろうか」との自立についての背景になる課題を具体的に考えてみようと思います。そして教育に関する自立の課題につなげていけることを期待して提起していきます。

A) なぜ「障害」のある人達が親から離れ、地域での自立にこだわるのでしょうか

a. 自分の存在があいまい?ミエナイ??

四日市で20年以上、自立生活をしている山口さんと、「なぜ、親離れなのか」について話したことがあります。彼女は「親と一緒にいたら、いつまでもこども扱い。まわりの人達もこども扱い。たとえば病院に行っても、医者は親に病気の説明をする。親もそれが当たり前として受け取る。たとえ私が30才を越えても」と理由を話します。まわりの人達が、顔つきや言語障害だけで一方的に通じないと、判断して親に話しかけます。親も「病気の説明は本人にしてほしい」とは言わないで、それを当然とします。そこに親の障害観が見えてきます。現在、彼女は病院で医者に「自分に病気の説明をしてほしい」とはっきりたのみます。いつまでも親と一緒にいたら、親は彼女のことを囲い込むと思いました。彼女は親が自分のことまで決めることを「それでよい」と思う自分が「怖かった」と振り返ります。なぜ怖かったのでしょうか。一つには自分の存在が親の存在により、「あいまい」になったり、見えなくなることへの危機感がありました。さらに親の障害観に飲み込まれ、「障害」だけではなく、自分までも否定しながら生きていくことへの大きな抵抗がありました。自分の存在が「透明」になることは生きている意味を見出せなくなります。そこで彼女は親から離れる決意をしました。そして、かけがえのない「私」を大切にするため、自分自身を表現できる場所に身を置き、人生を創ろうとしています。この親離れの話のなかに、「人が生きるとは、どのようなことなのだろうか」との基本となる問題が見えてきます。

b. 親とのけんかの勧め

萩原さんは親とのけんかを勧めます。萩原さんのけんかは実にみごとです。母親が看護婦さんであり、頼めば、病院への手続きなどは、楽にできたのですが、彼は病気の際は、

決して母親には頼まないで、自分で病院へ行きました。けんかの相手に一番有利な切り札をきらせません。借りをつくりたくないからです。頼むと、すぐにでもしてくれることを敢えて拒否して、絶対、自分を相手に服従させませんでした。強い意志をもち、常に、(けんか=自己主張)できる体制をスタンバイさせていました。また、母親が、だんだん親も歳をとってきて、「あんたの世話なんかしたくない」と感情的になり、一言、発したことを機会にアパートを借りて家を出ていきます。

なぜ彼は親との喧嘩を続けたのでしょうか。彼の話のなかに、ある視覚に「障害」のある女性との「結婚の話」があります。彼は母親に「結婚をしたい」と相談を持ちかけます。母親が「あんたみたいな不自由な子を抱えて、なおかつ、あんたの嫁さんの手を引っ張らねらんような生活は、私、したくない」との一言が、親子関係を決定的にしたと語ります。息子が愛する女性の思いを見るのではなく、彼女の「障害」だけを見て、結婚を否定したこと。さらに、母親が自分を「厄介物」としてとらえていることを鋭く見抜いています。「障害」のない親の立場からは、彼は「不自由」なこどもなのかもしれないが、萩原さんには、それは生まれながら続いている「あたりまえ」の状況であり、自分をまるごと否定されることでもないのです。彼と母親との障害のとらえかたの「違い」が鮮明に浮かび上がります。

「青い芝の会」の運動のリーダであった横塚晃一さんは「親からの独立」との表現で、親からの離れて、生活をする必要性を提起しています。「先ず親を通して、我々の上に覆いかぶさってくる常識化した差別意識と闘わなければならない」と親の「障害」のとらえかたを批判しています。そして親の障害者観の呪縛を解くことが、自己の「障害観」からの解放の原点と考えます。それでは横塚さんは親の障害観、障害者観をどのようにとらえていたのでしょうか。横塚さんは親が「障害」のあるこどもを殺害した事件に出会います。「重症児殺し」の事件です。そして「重症児」を殺した親に無罪の判決が下りた時、「障害」の子をもつ親が「ほんとに

よかった。他人ごとではない」と話していることと遭遇します。そしてこどもを殺害した親の気持ちの深層には、障害のあるこどもを産んだ「罪悪感」、つまり「脳性マヒ者は本来、あってはならない存在」とする障害観をみます。また事件の後、親を取り巻く人達が「あの子は重度だから殺された方がよかったのだ」「生きているより、死んだほうが幸せなのだ」と減刑嘆願運動を進めます。そこで彼がリーダーである「青い芝の会」は、「殺した親の立場だけに立ち、殺された障害のある人は無視されている」と異議を申し立てます。そして減刑嘆願運動を進める人達の意識の根底にある優生思想を問い始めるのです。

萩原さんが親から離れるための「けんかのすすめ」の話に戻ります。彼は、「人間が一番大切にしなければならないことは、何かをしてみたい気持ち」、そして「一番棄ててはいけないことは自分のしたいことがあること」と繰り返して、彼の生きている基本を説明しています。そして「自分のしたいことをさせてくれないのが、一番身近な母親だった」と断定します。それもけんかの相手を母親にした原因なのです。彼の「けんか」は、自分のしたいことをするために、主体性を保持しようとしたり、新しいことに挑戦をするための自分をしっかりと持つためのエネルギー源のように思えます。母親と衝突することで、自分を否定される時は、自己を見失わないようにしています。否定されながらも、自分の生きている意味、本質を真剣に見出そうとしています。そして、「衝突=けんか」を生きていく糧として、親と「違う」自分を明確に表現しているとも思えます。

B) なぜ親はこどもから離れられないのだろうか。

c. 親は卑屈になるべきではない

萩原さんは「必死になり、親の魔の手から逃れた自分があった」と振り返ります。なぜ親は障害のあるこどもには「自立」の壁となるのでしょうか。私が知っている障害のある人達のなかには、親の介護を得て、生活している人は多くいます。特に成人になっても家族が介護を続けている場合が多数です。それは一見、家族関係がうまくいき、「家族愛に満ちている」と、見られています。しかし他人が入り込めない「閉鎖的な関係」のためなの

か、本人がボランティアさんとの外出の介助などを望んでいても、親が「壁」になり、ボランティアさんは閉鎖された空間に入れないで、関係も長く続かない場合もみられます。そして「将来、親から離れて自立したい」と言えない人達もいます。「お互いに頼り過ぎている状況が長く続いて、親も自分も離れられない」と本音を語る人もいます。

なぜ親が子から離れられないのでしょうか。岡原正幸は「親自身が障害のあるこどもに生んだことで自分自身を責める場合が多い」と親が罪の意識を持ち続けること指摘しています。そして、それを「自己懲罰」の意識と呼んでいます。横塚晃一さんも「親は、本来あってはならない存在を、つくり出した責任を感じてか、障害児に関するすべてを一心に引き受けようとする」と親自身が障害のあるこどもを産んだ責任を自分だけに迫り込んでいることを記述しています。まわりの人達から期待された「五体満足なこども」を産めなかったため「ほんとに申し訳ないことをした」と家族に、そして社会には「ご迷惑をおかけします」とあやまり続けなければならない状況はみられます。ある自立を志す女性の話には親の障害観と彼女との関係がみられました。彼女は学校へ通っている時を振り返り、「親が先生に迷惑をかけますと言う度に、自分は迷惑をかけて、ごめんなさい。生きていてごめんなさいとつなげて生きてきた。親は卑屈になるべきではないし、卑屈になることを許せない」と話します。彼女の言葉には、どのような意味があるのでしょうか。「障害があるために迷惑をかけている」との親の障害への「否定的とらえかた」が本人の気持ちに根付きます。そして自分自身が学校で学んでいること、さらに生きていることさえも否定してとらえる状況が続くこと。生きていく自信や誇りをもてないこと。障害のある人達自身への価値づけは社会に潜在化している障害観と共鳴しあい本人に深刻な影響を与えています。このような自分のイメージを否定的にとらえ、自分を過小評価して生きている状況が自立に大きな影響をおそぼしているため、ピアカウンセリングなどの、自己の確立などの福祉サービスも生まれています。

d. 「世間」が親を追い込んでいる——親への世間のまなざし——

学校の教育のなかで世間から期待されている親の役割、責任の呪縛を解くことは意味が深いと考えています。発作をたびたび起こすこどもがひとりで通学を始める時、親は不安でたまりません。しかし、学校の教師が、通学の経験を親と共有することで、親ばなれ、子離れの機会をつくれます。河瀬さんは「もし、こどもに親が付き添って、皆が安心して居る雰囲気では、親は絶対に「世間」を信用しないだろう。安心して世間に自分のこどもを任せておけない感覚にさせる」と話します。

なぜ、親とこどもが寄り添うことは、「世間」との関係につながらないのでしょうか。まず背景から考えます。「障害」のあるこどもの親は常に世間から「親の愛」が試されているのです。そしてこどもが「迷惑」をかけると「親は何をしているのか」との「世間」の厳しい批判にさらされます。学校教育においても、修学旅行の付き添いに親が付いて行くことが期待されます。そして「家族愛」として、特に母親が愛する子の世話を献身的にすることを評価され、美談に仕立て上げられることもあります。「こどもを思う気持ちを疑われるのが一番つらい」母親は「私には、こどもを愛することしかできない」と必死になります。この期待の枠組みに親がはめ込まれる時、「世間」からの期待に親が過剰に応えていくのではないのでしょうか。親はこどもが身近にすることで、不安から解消され、安心であるとの理由もあり、さらに、自らの「生きがい」にして、こどもの世話に没頭をするでしょう。結果として、こどもから離れられない親がつくられると思います。そして「問題」が起きないように、リスクのあることをこどもに経験させない状況が、生まれているのではないのでしょうか。

e. 社会のなかにもいろいろな人達がいる

介助の必要な障害のある人がおとなになり、ひとりで外出したいと思う時、親は「ひとりでできるの」「何かあったらどうするの」と、外出させない場合がみられます。外出させない理由は(1)社会への不信、(2)親の不安、(3)こどもが経験をしていない等があげられま

す。浅井さんは「親が外出を止めさせる」理由の一つとして「誰もが、手伝いましょうかと声をかけてくれる社会があれば、安心して外へ出せるけど、出せない社会がある」との親の社会への不信を指摘します。さらに「親が自分の不安に我慢ができない」と、子ども離れをむずかしくさせている理由もあげています。「子どもが自分の目が行き届く範囲にいないと、親は心配で身がもてない。」「将来のことなど考えられない、私が頑張ってやれるうちは、私が子どもの世話をする」と子どもがしたいことを決める前に親が結論を出すこととなります。しかし、子どもからは「親が自分を信頼していないから、いつも一緒にいてくる」と悩む声もあります。

ここで親と社会との信頼関係がつくられていないことについて考えてみます。「社会を信頼できない」と一方的に断定している考えのなかには、障害があるために社会から意味もなく、疎外され、差別され、「他人はあてにならない」と思い知らされて、生きてきたことがあると想像できます。しかし、家族自身も「他人には迷惑はかけられない」、「社会はあてにならない」「私が不安になる」と、家族だけの介助に自らを閉じて、ますます、社会との距離を遠ざけている状況もつくりだしているのではないのでしょうか。

それでは、いままで、私たちは「障害」のある人とその家族と社会とを繋ぐことをどのようにつくりだしてきたのでしょうか。浅井さんは、障害のある人自らが「自分のできること、できないこと」を知るために親から離れて、徹底して自分を試す機会、場をつくることも重要な出発点となるだろうと提起します。学校の教育の場で、浅井さんの提起する場、機会づくりができるのでしょうか。最初から、他人を信頼しないで、家族だけの安心できる介助に限定することでは、決して自由にはなれないのではないのでしょうか。自分が「自由」になるためには、「自由」になれる「他人」との関係を、障害のある人自らが創り出すことではないのでしょうか、そしてまわりの人達はその応援をしていくことではないのでしょうか。外出などの介助の経験から思いますが、世の中には、いろいろな人がいます。なかには、冷たい人もいます。障害があるため、差別する人もいます。しかし、快

く手伝う人にもたくさん出会います。それらの繋がりの中に、おもしろい経験もできます。島倉千代子さんの歌にあるように「人生いろいろ、男もいろいろ、女だっていろいろ」の体験です。また介助の必要な人の生活は毎日、介助の人達を捜し、「介助の人が見つからない」と、こぼしながらも地域の人間関係をつくりながら、続けています。「世の中は捨てたものではない」と思います。決して「安心の基地」に隠っていては、自分がしたいことを実現できません。自ら、未知の人間関係を求め、いいところ探しをするのではなく、みんなで、「いいところづくり」をすることで、親離れ、そして自立の道が開かれるのではないのでしょうか。

キーワードで学ぶ人権

①「自立」の概念の変化

「自分の思いを基に、援助を受けつつ、自らが組み立てる地域での生活」と簡明な自立の定義が自立生活運動の過程でうまれました。「障害」のある人達が、自ら選択、決定することを基本としたいとの願いが込められています。そこで、自分が望むことを実現していくためには、まわりの人との関係をつくり、助け合いが続けていける「共生の社会」づくりも目標になります。

なぜ「自立」の概念が「障害」のある人達により、変えられているのでしょうか。

その背景には多くの「障害」のある人達が「自分で、決める能力がない」と、判断され、親や教師あるいは福祉関係の人たちに、生き方を決められてきた経緯があります。まわりの人たちが決めたことに従うのでは、人生の重要なことを決定したり、責任をとれない状況が続きます。いつまでも自分らしい生き方が実現できません。自分の意見を持つ必然性もなくなり、気力や自信を失い、他人に依存することもみられます。失敗をしながらも、責任をとり、自信をもてるような機会をつくりたいと願っています。